
鬼遊び

九九ノ字 佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼遊び

【Nコード】

N7190Y

【作者名】

九九ノ字 佳

【あらすじ】

森の奥で迷子になっていた幼い頃の私を助けた「彼」との約束。それが全ての始まりだった。 人と妖怪の少し歪んだ恋愛話です。

昔の約束

町の人工的な明かりが無くなる森の奥。

夜の時間帯に姿を照らすのは月明かりのみ。

そんな時間帯に森の奥で迷子になってしまった幼い頃の私に

現代では見ることが少なくなってきた着物を正しく着こなした「彼は笑いながら言ったんだ。

「僕とある約束をしてくれるなら助けてあげますよ。どうします？」

幼い頃の私は優しくそうで、人が安心するような笑顔と早く帰りたいという思いから

「彼」の言葉に頷いていた。それが間違いだと気づくことすらしやうとせずに。

知らず知らずのうちに私は取り返しのつかないことをしてしまった。

私と「彼」の約束は

「それでは16になったら迎えに行きます」

共に生きていくことであつたからだ。

1 - 1 話 まえぶれ

白い梅木は赤染まる

ゆらり ゆらりと

人、地に落ちた

オニゴッコ

いつも通りの朝だった。

自分が病気になったわけでもないし、

親や友達が怪我をしたわけでもない。

特に何かがあったわけでもない普通の朝だった。

だけど

どうしてか私はおかしかった。

一つ、一つの動作にもびくびくしてしまう体。

友人に声をかけられただけなのに

どくどくと激しく動き出す心臓。

回りの視線に恐怖が止まらない。

どうして

こんなにも

不安になるのかわからなかった。

学校に行く道の途中で

泣きそうになる。

自分が自分じゃないような気がして立ち止まりたくなった。

1 - 2 話 不安

鬼の子 クスクス

笑うて 人の子

追いかける

オニゴッコ

ガクガクと震えている足と

弱音を吐いている自分の心に

気合いをいれて歩き出す。

もうすぐ学校に着くんだからと

心の中で暗示のように繰り返しているが

それでも不安は残っていた。

学校に着けば

私のことをよくわかつてる友人や

大好きな恋人がいる。

早く学校に着いて

咲や健太に

励ましてもらおう。

どうやって甘えようかと考えながら

歩いていると思いのほか早く学校が見えてきた。

学校が見えてきたことに安心したせいかな

さっきまでずっと自分の心の中にあつた不安が薄れたように思う。

だからだろうか。

私が後ろから伸びてきていた手に気がつくことができなかったのは。

1 - 3 話 知らない手

捕まえた

捕まえた

鬼の子 一人

上機嫌

オニゴッコ

ようやく落ち着いてきた私は安心しっぱなしだったらしい。

回りに気を配る余裕はなく

簡単に

ぐいつと後ろから

自分を抱き締めるように伸ばされた手に

捕まってしまった。

逃げられないようにと力を込められて

抱き締められているせいかな

少し息苦しい。

知っている人なら

まだしも

私を抱き締めている手に見覚えはなく、
焦りながら必死になって

私はもがいた。

健太に見られたら

怒られるし

痴漢だったら怖いからだ。

だけど、女の力ではなかなか外れない力で抱き締められているらしい。

私が押し退けようと力を込めても
びくともしなかった。

「い、嫌。はなしてよ」

泣きそうになっている私の声に気がついたのか

後ろの人は腕をゆっくりはなし

捕らえていた体を解放する。

ほっとして

その人から急いで距離をとり

誰がしたのかと

振り返ってみると

そこにいたのは

穏やかな笑みを浮かべる

「彼」だった。

1 - 4 話 約束

泣き叫ぶは

人の子よ

助かることは

無いと知る

オニゴツコ

白い短めの髪。

赤みがかった桃色の目。

少し幼い顔立ち。

薄い水色の

現代では見ることが少なくなってきた着物。

その上から羽織っている梅の花が描かれた羽織。

優しいような笑み。

懐かしい記憶通りの「彼」がそこに立っていた。

何も変わっていない。

あれから何年もの月日がたったはずなのに一つとして変わっていない「彼」に

恐怖が芽生える。

「迎えに来ましたよ」

笑いながら「彼」は言った。

どうしてかわからないが

近づこうとしないところが気味悪く感じる。

逃げ出しても簡単に捕まえられるということなのだろうか。

「迎えって、本当に？」

一歩後退りながら私が聞くと

「彼」も一歩踏み出して距離をもとに戻しながら答えた。

「はい。約束のこと、忘れたとは言わせませんよ?」

同じ笑顔のはずなのに

恐怖しか感じないのは

「彼」の目が笑ってないからだろうか。

「だ、だけど……私達名前も知らないんだよ?」

「今、知れば問題ありません。ちなみに僕は 白梅 葉月 で
す」

ああ言えばこう言う

ってこんな状態の事を言うんだなと思いながら

言い返そうとしたとき

「何やってんだよ」

大好きな恋人の声が聞こえてきた。

1 - 5話 出会う

歪み 歪んだら

もうもとに

戻ることはない

オニゴッコ

声のした方を向くと

わかっていた通り恋人である健太が鞆を手に

私達を見ていた。

私はつい、健太が通りがかった事に感謝しなくなった。

一人だったら「彼」

確か、白梅さんだっけ？

の相手はできそうにない。

そんな風に思っていると

「何やってるんだって聞いてんだけど？」

健太は私達が二人とも

答えないことが

気にくわなかったのか

顔をしかめながら

さっきより少し強めの口調で
もう一度問いかけてきた。

私は慌てて

答えようと口を開くが

「貴方には関係ありませんよね？」

白梅さんの方が先に答えてしまう。

「何、言ってるんですか！白梅さん」

そう言おうと

視線を白梅さんの方に戻すがすぐにそれを後悔した。

白梅さんは

いつもの笑顔じゃなく

無表情でどこから取り出したのか日本刀を構えていたからだ。

1 - 6話 恐怖

誰かに

見られるくらいなら

自分の手で

折ってしまおうか

オニゴツコ

白梅さんは刀を

構えたまま動かない。

そんな様子を見ながら

どこから刀を出したのか、とか

何で刀を持っているか、とか

いろいろ聞きたいことも

言いたい事もあったけど

どれも口には出すことはできず

心の中で消えていった。

「邪魔ですね」

ぼそりと

誰に言うわけでもなく

白梅さんは呟いた。

「はあ？」

健太が訝しげに声をだすが

白梅さんは気にした様子もなく続けて呟く。

「彼女のそばにいていいのも、触れていいのも、話しかけていいのも、見ていいのも、全部僕だけなのに」

その声音に

まるで冷たい手で直接なぜられたように
ぞわりと寒気がした。

だけど、健太は恐怖を感じたわけではないらしく

怒ったように

「ふざけてんじゃないぞ、お前。こいつは俺のだ!」

私を引き寄せながらそう言った。

その様子をきょとしたような目で白梅さんは見ていた。

何故か、すごくいたたまれない気分になる。

「し、白梅さん?」

そう声をかけた瞬間、

「ふふ…ふふふ……あははははははっ」

白梅さんは笑いだした。

1 - 7 話 笑顔

散らせ 散らせ

命の花を

自分の言葉で

散ってしまえ

オニゴツコ

刀を構えたままの手を動かすことなく

さも可笑しいことを

言っただけのように

笑い続ける白梅さんを見ていると

体が反射的にあとずさってしまった。

「な、何だよ。気持ち悪い」

健太もこれには

気味悪く感じたのか

同じように顔をひきつらせて

あらずさっていた。

白梅さんは私達の反応には興味がないのか

気にした様子もなく

刀の握り直した後、笑顔で言う。

「…あなたのもの？…ふふっ…なに言ってるんですか。ふざけるのもいい加減にしてください。」

殺すぞ、童」

その笑顔を見た瞬間、

恐怖がよみがえり

つい私は体を抱き締めてしまう。

私、さつきから怖がってばかりな気がする。

なんて

考えて現実逃避をしてみても

現状は悪い方向にしか動かなかった。

1 - 8 話 失踪

大切なものは

手の中 いれて

壊そうか

オニゴツコ

カチャリ っと刀を握り直しながら妖艶に微笑む白梅さんと
恐怖で動けなくなった私達。

だけど、やっぱり白梅さんは私達を見ようとせず
空を見ながら自分にたいして呆れたように

「…童ごときに時間を使った僕が馬鹿でしたね。もう、貴方は必要
ありません」

そう言った。

白梅さんがそう言った後だったのか前だったのか

よくわからなかったが

言葉が聞こえたと思った時には

もう、健太の首から上と下は

繋がっていなかった。

血が飛び散り、

重力に逆らうことなく

崩れ落ちていく体。

目の前が真っ黒になったような気がした。

現実味のない、

まるでテレビを見ているような気分でもあった。

白梅さんにとっては

何でもないことらしく

健太の頭を踏みつけながらなお愉快だと笑っている。

その日、

真島 健太 死亡のニュースと

私、涼風 さち

失踪のニュースが

各地で流れたのだった。

2 - 1 話 始まり

カタリ コトリ

家の中は

誰にも見せまい

レンカ

自分からと言うよりは

連れ去られる形で

白梅さんに
連れてこられたのは

山の奥の奥にある小さな町だった。

そこで、始まった

白梅さんとの無理矢理な

新婚生活。

もう逃げ出したいと

何度、思ったことだろうか。

だけど、逃げれるわけもなく

私はどうなっていくんだろうと

今日も不安になるのだった。

桜が咲いたら

二人で寄り添い

向日葵が咲いたら

共に歩き

秋桜が咲いたら

言葉を交わし

雪が降れば

愛しあう

これは

物語ではなく

一つの恋歌 レンカ

私達の歪んだ恋のための歌だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7190y/>

鬼遊び

2011年11月23日05時48分発行